

2011（平成23）年の震災から、震災復興計画をもとに、仙台市の復興まちづくりはどのように進んできたでしょうか。また、未来のまちづくりでは、何を残して何を新しくしていくことが大切かを考えましょう。

1 新しいまちづくり

津波で大きな被害を受けた仙台市沿岸部の一部は、災害危険区域に指定されました。仙台市は、元の場所に住むことのできなくなった人たちを支援するため、市内の30か所以上に復興公営住宅（集合住宅・戸建）を建てたり集団移転先の団地を作ったりしています。



荒井東地区に建てられた復興公営住宅

その中の一つ、荒井東地区には、新たなまちが作られています。住居ゾーンには、復興公営住宅や特別養護老人ホームが建てられました。防災拠点ゾーンには、公園や警察署、病院などが予定されています。駅前にぎわいゾーンには、2015（平成27）年12月に開業した仙台市営地下鉄東西線の荒井駅があり、仙台市東部の新たな中心地となっています。この駅の中には、震災の経験や教訓とともに、沿岸部の良さを伝えていくための拠点として、震災メモリアル施設が作られました。



伝統的な屋敷林「イグネ」をイメージした荒井駅

2 子どもたちによる未来のまちづくり

イグネ（屋敷林）や田んぼが広がっていた荒井地区。震災以降、仙台市立七郷小学校の目の前の田んぼは新しい住宅地になり、復興公営住宅が建てられました。仙台市営地下鉄東西線が開業し、荒井駅ができました。



未来のまちの模型製作

七郷小学校の6年生は、「未来のまちはこうなってほしい」という思いを持ち、10年後のまちを想像して模型に表現しました。復興と開発でこれからも変化していく荒井地区の模型には、環境や文化、防災の視点から考えたアイデア、そして、七郷小学校6年生全員の夢と希望が詰まっています。

国連防災世界会議での発表

2015（平成27）年3月、第3回国連防災世界会議が仙台で開催されました。



西中田小学校5年生の防災の授業

この会議は、国連加盟国（187か国）が災害からより安全な世界を目指し、防災に関わる取り組みについて話し合うために開かれます。

市民会館で行われたイベント「新たな防災教育フォーラム」では、仙台市内の小中学校の児童生徒代表による①復興ソング、②防災教育の授業、③防災教育の取り組みについての発表が日本国内外に向けて発信されました。

仙台大会では、「仙台防災枠組」と「仙台宣言」が採択されました。